ようこそ盈進の読書科へ

読むことは「知る」こと
書くことは「考える」こと

盈進は「平和、ひと、環境」を大切にする中高一貫の学び舎です。豊かな言語力を身につけ、確かな倫理観を養い、きらりと光る独創性に磨きをかけることを目指す「ひとづくり3教科」を学校教育の柱に据えることで、たくましく生きる力を育む教育を展開しています。中でも「読書科」はすべての学力の基盤となる「ことばの力」を培うオリジナル教科として特に中心的な役割を担います。

EISHIN GAKUEN

SPECIAL INTERVIEW 2023

～未来の学びと出合う読書科～

岡山大学 理学部
生物学科へ進学

武田 柊哉（たけだ しゅうや）

2022年度高校3年生
福山市立御野小学校出身

読書科の学びは1992年盈進中学校再開と共に始まりました。2007年からは中学3年生による修了論文が始まり、探究学習の先駆けとなる取り組みをおこなっています。2023年度の「ようこそ盈進の読書科へ」の冒頭を飾る卒業生インタビューのテーマは「未来の学びと出合う読書科」。今春盈進高校を卒業した武田柊哉君へのインタビューです。武田君は2019年度修了論文においてコケについて探究（優秀賞を受賞）し、そこで自らの学びの原点を見つけた生徒です。

◆岡山大学合格おめでとう。大学ではどんなことを学びたいと思っているの？

――― 僕は中学3年生で出合った「コケ」の世界に魅了され、高校生になっても「コケ」への興味・関心を持ち続けました。大学では本格的な「コケ」の研究を進めたいと考えています。現時点では「進化生態学」という分野に1番興味があるのですが、入学後はまずしっかりと生物学の基礎知識を学び、研究技法を身に付けたいと思います。それから論文などは全て英語で書かなければならないので、英語の勉強も。

◆そもそも中学3年生でどうして「コケ」の世界に出合ったの？

当時の担任の先生が「コケ」好きな理科の先生だったんです。中学2年まで環境科学研究部に所属（以降音楽部に所属）していた僕は、もちろん生き物には興味があった方だと思いますが、正直コケには全く興味がありませんでした。でも先生に誘われてコケ探しのために学校周辺を歩いたとき、そこで初めて地面に生えているコケをルーペで見たんです。コケの種類の多さやその美しさに衝撃を受け、そこから一気にハマりました。

中学1年生の入学式

◆修了論文も「コケ」がテーマだったよね。

はい。僕がコケについて興味を持った時期がちょうど修了論文に取り組む時期と重なっていて。そこから生態や文化的な面を調べれば調べるほど新しいことを知ることができてどんどんのめり込んでいく自分がいました。自分にとって初めて熱中できるものが見つかったと思えました。
楽しんで取り組んだ修了論文が優秀賞に選ばれたり、プレゼンテーション大会にも出場したり、と僕の中学3年生の1年間はとても充実した時間となったことは間違いありません。

中学2年生 シーサーと

◆武田君が中学3年生だった2019年度からフィールドワークの実施が加わったよね？

世界で唯一コケを専門に研究している服部植物研究所（宮崎県）の片桐所長とメールのやりとりをさせて頂きました。また秋には「キャリア教育in京都」という中3の学年行事があったので、そこで京都大学の杉山教授のお話を聞かせて頂き、個人的に連絡を取ることもできました。それから、倉敷で古書店「蟲文庫」を営んでおられる田中美穂さんという方との出合いも大きかったです。田中さんは、コケやカメや星座について探究され、書籍も出版されている方です。田中さんの書かれた『苔とあるく』（WAVE出版）と『ときめくコケ図鑑』（山と渓谷社）の2冊は、僕をコケの世界に導いてくれた大切な本でもあります。

仲間と一緒にコケを観察中

◆修了論文の最後が「研究者でなくてもちょっと研究してみたいという気持ちに繋がった」という結びになっているけれど、本当に研究者を目指すことになるとはね！

実は6年生（高校3年生）の最初までずっと「薬学部」志望にしていたんです。薬剤師になりたいとか、薬学を学びたいとかという気持ちよりも、とりあえず高い目標を持つために掲げていました。でもいざ本格的に志望校を絞っていく段階になって、「本当に自分がやりたいと思っていることって何だろう」と思い至りました。好きなものを選んだ僕を家族も応援してくれました。

◆武田君をそこまで魅了するコケってどんな生き物なんだろう。

―――― 僕はまずコケの「見た目」に魅了されたんです。スナゴケという種類は葉が開いた時、上から見ると星のように見えます。きれいで鮮やかな黄緑色の星は僕にとって衝撃的でした。地面や壁一面に雄大な緑の絨毯を織り成すコケの美しさ。そしてそれをルーペで見た時に広がる豊かな世界…いつも見ていた世界とはまた違う景色の広がりでした。小さなコケは僕に新たな目線をくれたんです。それからコケは陸上に最初に上がったとされている生物なんです。それこそ4億年も5億年も前です。体のつくりは至ってシンプルで原始的。普通の生物だったら未発達の体ではどんどん他の生物に侵食されて負けてしまうだろうけれど、コケは違います。自分たちの生きる場所を確保してきた逞しさを持っている。たとえば、普通の生物って人間もそうですけど「保水」が大事ですよね。でもコケはたとえ水がない環境でもそれに適応して生きていくんです。原始的でロースペックなのに上手に生き抜くコケの適応力は、とっても魅力的です。

◆コケを研究することで、どんな未来が思い描けるの？

―――― コケってまだまだ分かっていないことの多い生物なんです。でも最近の研究で二酸化炭素を多く吸収することができるということが分かってきています。これは高校生になって授業で取り組んだ「探究」の活動の中で知りました。僕の修了論文には続きがあったんです。「蟲文庫」の田中さんの所にも通い、たくさんのヒントを頂きましたし、京大フィールド研の伊勢准教授とも連絡をとって学ばせて頂きました。僕はコケの生態を環境問題からアプローチする手法で調べたんです。土がなくても生きることのできるコケを壁や屋根に植えれば冷暖房削減にもつながるかもしれないということも分かっています。今後研究が進めば人類を苦しめる病気にだって対応できるかもしれない…コケの持つ力は未知数ですし、だからこそ研究の価値が期待されています。

◆コケが未来を変えるかもしれないね。では中高6年間を振り返って、中学生のみんなにメッセージを。

―――― 1つ言えることは、どこに自分の未来を変える「きっかけ」があるか分からないということです。僕自身が「コケ」というテーマに出合ったのもそうです。色んなことに興味を持って、まずは自分の足でそこに行ってみて、実際に触れてみる。ちょうど僕が中学3年生だった年からコロナ禍が始まり、学校生活もクラブ活動も学校の行事も全てに制限がかかっていったんですが、それももうすぐ落ち着くのではないかと言われています。だから皆さんもじっとしていないで、自分の足で自由に動いてみてください。その中でピンときたものを調べ、深めていく。それから、僕は人との出合いにも恵まれていたと思います。修了論文の取り組みもそうですし、自分の進路を切り拓くという時にも、これから社会で生きていく時にも、誰と出合うか、その人とどう関わるかは本当に大事なことだと思っています。

これから僕は世界中にある色んなコケを自分の目で見てみたいと思います。本でしか見たことのなかった世界です。本と出合い、人と出合う修了論文は皆さんにとっても大きなチャンスになるはずです。

◆修了論文を通して自分の未来の学びに出合えたということだね。自分の好きな学問を究めて、世界を変えるコケ博士になってね!!!

武田君が中学３年生の時に書いた修了論文の冒頭文

序章　はじめに

第１節　動機

最近巷で「コケ」がひそかなブームを巻き起こしている。「コケガール」という言葉もあるくらいだ。ブームが起こる少し前までは、道を歩いていてもコケに注目する人などそう多くはなかっただろう。私にとっても、コケとは「ブロック塀に生えた緑色の物体」でしかなかったのだから。

３年生になった今年の４月、担任の先生のコケ散歩について行った。担任の先生は無類のコケ好きだ。そして、そのとき単純に驚いた。コケに種類があることを初めて知ったからだ。私たちの何気ない生活の中には、知らないことや、わかった気になっていることがたくさんあるのだということをその一瞬で悟った。まさに、「無知の知」とはこのことだ。ソクラテス（紀元前469年頃～399年）は、哲学界の巨人である。民衆を導くような哲学者と違い、人生というものをひたすら考えた。代表的な言葉に「私は、知らないというただ１つのことを知っている」という言葉がある。知ったかぶりをして生きているよりも、知らないことを自覚し、豊かな人生に考えをめぐらせたほうが有意義だという考えだ。これを「無知の知」という。私が修了論文のテーマにコケを選んだのは、私に「無知の知」を気付かせてくれた存在だからだといっても過言ではない。

第２節　疑問と仮説

テーマが決まった私は、次に疑問を探した。論文というものは、疑問と仮説、そしてその検証が必要だからだ。正直に言うと、コケについては疑問しかなかったため、逆に疑問を選ぶことが難しかった。生態、特徴、種類はもちろん、私はコケについて完全に「無知」だったのだ。そんな時ふと、「コケがなぜ今注目され、ブームを巻き起こしているのだろうか」と思った。しかも、主に「女性に」である。現代の流行の中心を担う女性が興味を持つということには何か意味があるはずだ。私は瞬時に「SNSによる拡散が原因だ！」と思った。これからコケについてさまざまな角度から述べていくが、なにしろ「無知」であるから知識の部分がかなり多い。興味のない方は読んでいて退屈と感じるかもしれないが、どうか辛抱して最後まで読んでいただきたい。また、単純にコケ本体の論文として読むのではなく、自分自身の生き方にまで広げて深く深く読んでいただければ幸いだ。

※武田君の修了論文の
全文はこちらから
お読み頂けます。
（約10000字）

修了論文プレゼンテーション大会にて

Special Report 1

子どもノンフィクション文学賞受賞！

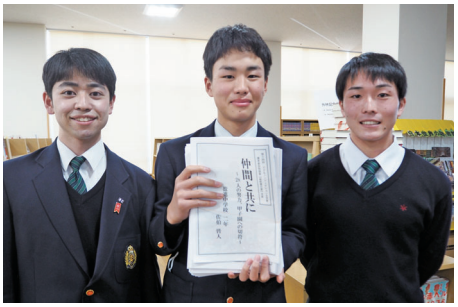
森鴎外や火野葦平、そして松本清張など日本の近代化と共に数多くの文学者を生み出したことで知られる北九州。そうした豊かな文芸土壌を継承すること、また、人々や社会への関心を持つきっかけとなることを目指し創設されたのが北九州市主催「子どもノンフィクション文学賞」です。

第14回目となった今回は国内外から小学生の部253編、中学生の部207編の合計460編の応募があり、中学2年生（当時）の佐伯皆人君（福山市立日吉台小学校出身）が選考委員特別賞の最相葉月賞を受賞しました。

第14回子どもノンフィクション文学賞 表彰式　2023年3月18日 北九州市文学館
（選考委員のあさのあつこさん、リリーフランキーさんのお姿も）

受賞作のタイトルは『仲間と共に～28人の努力、甲子園への切符』。2022年度甲子園出場を果たした野球部の高校3年生全員にインタビューを試み、その強さの秘密を探った原稿用紙50枚の大作です。

（2023年2月27日 卒業直前の先輩たちに受賞を報告）



取材で最もお世話になった朝生弦大キャプテン（右）と内海太陽マネージャー（左）と一緒に。

授賞式での佐伯君のスピーチ

僕の通っている広島県の盈進中学高等学校はこの夏、48年ぶりの甲子園出場を果たしました。コロナ第7波の真っ只中で、学校中が異様な熱気に包まれました。圧倒的存在感を放つ甲子園球場でプレーする先輩方の姿は今も目に焼き付いています。あの日の感動を何かに残さねば、これが僕がこの作品を書いた最大の動機です。

野球部の高校三年生28人全員にインタビュー。中学軟式野球部に所属する僕にとって憧れの存在との延べ1000分を超す夢のような時間でした。取材ノートは高校球児の声でいっぱいです。何を書くか、何を書かないか、50枚の原稿用紙に書ききれない選手たちの思いに触れました。

今僕は、野球という競技がなぜこれほどまでに人を惹きつけるのか、そんな文章を書いています。僕のノンフィクション第2章です。このような素敵な賞を頂けたことが大きな自信になりました。野球部の先輩方、そして選考して下さった最相葉月先生に感謝します。本当にありがとうございました。

（取材は感謝祭を終えて少し落ち着いた10月からスタート。先輩たちには受験の合間を縫って協力して頂きました。）

今回特別賞をくださった選考委員の最相葉月先生は、1998年『絶対音感』で第4回小学館ノンフィクション大賞を受賞。2007年には『星新一 1001話をつくった人』で第34回大佛次郎賞、第29回講談社ノンフィクション賞、第28回日本SF大賞等を受賞。そのほかにも科学技術と人間の関係や精神医学、教育などをテーマに数多くの作品を刊行する凄腕のノンフィクションライターです。讀賣新聞の大人気連載「人生案内」の辛口回答にも多くのファンがいることでも知られています。会場でお会いした最相先生が「よく取材したね！あっぱれ」と褒めて下さいました。

選考委員の先生は最相葉月先生のほか、『バッテリー』で知られるあさのあつこさんや、『東京タワー オカンとボクと、時々、オトン』の作者で俳優としても活躍されているリリー・フランキーさんがいらっしゃいます。

【最相葉月先生の作品紹介】

佐伯君お気に入りの一冊『東京大学応援部物語』（集英社）にサインをして頂きました！

これらの本は盈進図書館みどりのECLで読むことができます。ぜひ手に取ってみてください。

佐伯君の作品の全文はこちらからご覧頂けます。

最相葉月先生の選考講評（抜粋）

最相賞は「仲間と共に～28人の努力、甲子園への切符」です。軟式野球部のピッチャーでもある著者が、48年ぶりに夏の甲子園に出場した同校の高校野球部員をエースから補欠、マネージャーまで全員に取材して各人を紹介した作品です。ただの人物紹介ではないのは、その人物ならではのエピソードや第三者評を交えて立体的に描き出していること。この28人のエネルギーと強い精神力があったからこそ甲子園の扉が開いたのだと思わされました。よく取材しましたね。あっぱれです。

第14回子どもノンフィクション文学賞中学生の部 選考委員特別賞最相葉月賞受賞

仲間と共に～28人の努力、甲子園への切符～

盈進中学校二年 佐伯皆人

九つの人九つの場をしめてベースボールの始まらんとす（正岡子規）

今年没後一二〇年を迎える明治の俳人正岡子規が大の野球好きだったことはよく知られている。幼名「升（のぼる）」をもじった「野球（のぼーる）」という雅号を用いた子規はアメリカより伝来して間もないその球技に大いに魅了されていたようだ。野球伝来から一五〇年を迎える今年、甲子園球児のヘルメットにはそれを記念するステッカーが貼られていた。今や国民的スポーツとして老若男女から愛される野球。とりわけ高校野球に対する人々の熱量には目を見張るものがある。

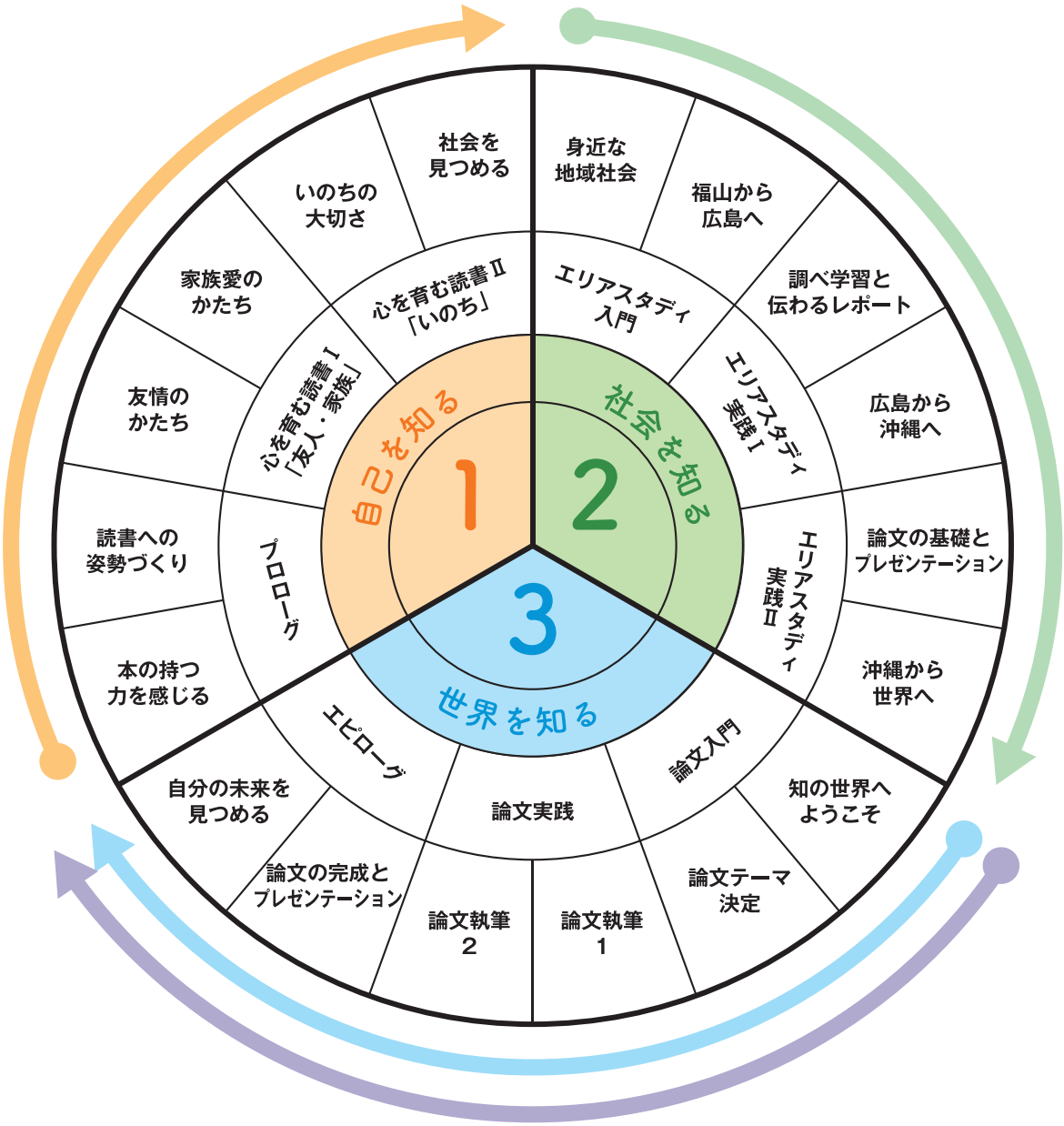
二〇二二年八月七日。僕は兵庫県西宮市にある甲子園球場のアルプススタンドにいた。青い空にくっきりと浮かぶ夏雲。黒土と緑のグラウンド。そしてスタンドを埋め尽くすスクールカラーのえんじ色。強烈な色のコントラストが十四歳の僕を圧倒した夏だった。

甲子園、それは言わずと知れた高校野球の聖地である。全国十三万二二五九人の高校球児（日本高等学校野球連盟令和四年統計）がしのぎを削り、全国の高等学校三五四七校（今大会）の頂点目がけて熱戦を繰り広げる。各校の甲子園のベンチ入りは一八人だから、実に0・67％の確率でしか立てない舞台に僕たちの先輩がいる。その夢のような光景は今も僕の脳裏に焼き付いて離れない。

（冒頭文のみ掲載）

読書科の学び ～本と出会い、ひとを知る～

読書科の授業には各学年に「学びのテーマ」が設けられています。週1回の授業で選定図書を年間10冊以上、3年間で30冊読むことを目標にしています。3年間の読書活動の中で、前半は仲間と本を読む一体感を味わいつつ、お互いの意見を交流することで、心を豊かに育みます。また後半は、私たちが生きる社会について知り、この世界で今起きていることを見つめ、各自が考える課題を解決します。「読み、書き、伝える」活動の中から自分の生き方を見つめる教科です。



読書科３年間の学びのテーマとカリキュラム

1年生

2年生

2年生では沖縄についての調べ学習をおこなうため、この他にも沖縄に関する本を多数使用します。

3年生

3年生では各自の選んだテーマに基づいて『修了論文』に取り組むため、使用する本も1人ひとり異なります。
学校図書館、公共図書館の所蔵する本を自分で見つけることから始めます。

1年生のテーマ 自己を知る
personal

1年生のテーマは「自己を知る」。家族や友人とのつながりを通して心の成長を遂げる主人公の姿に、自分自身を重ね合わせて読みます。さまざまな愛情のかたち、友情のかたちに触れ「かけがえのない自分」に出会うとともに、自分を取り囲む人の存在にも気づくようになります。心を育みながら本が大好きになる1年間です。

2年生のテーマ 社会を知る
local

2年生は「自己」から「社会」へと視点を移し、読書活動の領域を拡げます。私たちの故郷「福山」そして「広島」について知り、「平和」というキーワードを学習旅行で訪れる「沖縄」さらに「世界」に結び付けます。「地域研究」×「平和学習」が生み出すドラマチックな読書活動を展開する学年です。

3年生のテーマ 世界を知る
national global

「自己」から「社会」へと視野を広げた2年間の学びを経て、3年生ではもっと広い「知の世界」での学びを体験します。自分の興味・関心のある分野からテーマを設定し、4000字以上の文章をまとめる修了論文は中学校3年間の読書活動の集大成となります。

未来を見つめる15歳へ　～ドリームプロジェクト～

EISHIN DREAM PROJECT

盈進の建学の精神は「実学の体得」。社会に貢献できる人が持つ本当のにんげん力を身に付けるために「読書科」が創設され、四半世紀を経ました。そこで、こうした教育理念を大切にしつつ、「読書科」が主体となって「未来を見つめる15歳」を育成するため、「ドリームプロジェクト」を立ち上げました。

「ドリームプロジェクト」では、生徒たちの読書活動をさらに充実させるため、読書行事や講演会を企画、また読書環境の整備をおこないます。生徒たちの夢の実現を後押しする、盈進の「読書科」。ワクワク・ドキドキがいっぱい詰まった学びを一緒に体験しませんか？

にんげんの授業

信岡 香羽
府中市立国府小出身

自分の見え方を知る

中学生 信岡 香羽 13歳

私たちの学校には「にんげん」という授業があります。「人から学び、自分で考える」をテーマにクラスのみんなと自分について考えています。

ある日の授業で、自分の良いところをみんなに見つけてもらうことがありました。相手の良いところはたくさん出るのに、自分の良いところはあまり見つかりませんでした。私はみんなに良いところを書いてもらえるだろうかと、不安でいっぱいでした。

しかし、良いところを書いてもらった紙を見て、とても安心しました。自分で考えていたこともありましたが、自分では思いもしなかったことがたくさん書いてありました。自分にはこういう面もあったんだと初めて感じることができました。

この授業で、仲間や友達の存在はとても大切だと思いました。これからも友達と仲良く、中学生活を送っていきたいです。

（福山市）

（2023年2月24日金曜日）

クラブ活動

苅屋 真由
福山市立神辺小出身

応援部 得がたい体験

中学生 苅屋 真由 13歳

私は中高一貫校に入学して、応援部に入部しました。最初のうちは何をするのか、どんな先輩がいるのかなど分からないことばかりで不安でした。でも、先輩方がとても良い人ばかりで、毎日楽しく部活動ができています。

昨夏、高校の野球部が全国高校野球選手権大会に出場しました。広島大会の決勝、私は部の一員として応援に駆け付けていました。48年ぶりの甲子園出場が決まった瞬間、野球部員や保護者や先生方が涙を流しながら喜んでいる姿を見て、すごく感動しました。

また、うれしかったのは、甲子園出場が決まった日は私の誕生日でした。私は応援部に入って1年目で、甲子園に行くことができて良い思い出ができ、とても幸せです。

なかなかできない良い経験をさせていただきました。応援部に入って良かったと心から思っています。これからも選手たちの応援を頑張りたいです。

（福山市）

（2023年2月8日水曜日）

登下校

千鶴 龍馬
尾道市立御調西小出身

バス通学 景色楽しむ

中学生 千鶴 龍馬 13歳

僕はバスで1時間近くかけて、中学校に通っています。入学してしばらくは長時間バスに乗ることに慣れておらず、家を出る時間が早くて、睡眠の時間が短いので、寝ていることがほとんどでした。

そのうち慣れてくると、外の景色を眺めるようになりました。すると、同じ道でも日によって見える景色が違うことに気付きました。

特に晴れの日と雨の日では、大きく変わって見えます。他にも、田んぼの稲が夏は青々としていたのが、秋になり黄金色になっていました。毎日変わる外の景色が面白いと感じるようになりました。

冬にはどんな景色が見られるかとても楽しみです。これからも、いつも通る同じ道でたくさんの発見をしていきたいです。

そして来年、再来年、その先の未来もゆっくりと窓の外をのどかに眺められるような平和な世界であってほしいです。

（福山市）

（2023年2月1日水曜日）

クラブ活動

髙橋 孝輔
福山市立神辺小出身

部活で川のごみ懸念

中学生 髙橋 孝輔 13歳

今年、中学生になった私が入ったのは水生生物、特に淡水魚を保護し、飼育する環境科学部だ。

飼育する魚を採集に行けるのが、この部活を選んだ理由だ。いろいろな川に出向き、網を片手に川へ入っていくのが楽しい。魚を採集するためにどのような所を探せばいいかや、魚の種類を学ぶことができる。私のように生物について詳しく知りたい人には楽しい活動だ。

楽しい半面、嫌なこともある。川にごみが流れていることだ。河川敷にたばこの吸い殻が落ちていたり、水中の岩にレジ袋が引っかかっていたりしているのを見た。

ごみが落ちていると水が汚れたり、魚が誤ってのみ込んだりするかもしれない。瓶やガラス、プラスチックの破片が川底に落ちていると、足などに刺さるかもしれない。

安心して魚がすめ、人が遊べるようにするために、ごみのポイ捨ては絶対にしてはならないと改めて思った。

（福山市）

（2022年12月6日火曜日）

13歳 ヤングスポットに挑戦！

中学１年生は日常生活や自分の夢を文章化し、中國新聞「ヤングスポット」への投稿に挑戦しています。

（2023年2月16日木曜日）

手話通訳士

山本 花奈
福山市立神辺小出身

手話学び貢献したい

中学生 山本 花奈 12歳

私は手話通訳士を目指している。手話に興味を持ったのは、中学校で入った部活がきっかけだ。

活動の一つに手話歌がある。手話歌を始めたのは、耳が不自由な先輩がいらっしゃったからだそうだ。「障害は不便だけど不幸じゃない」。これは、その先輩がおっしゃっていた言葉という。私の心に深く刻まれている。私は耳の不自由な方のために「不便」を「快適」に変えたいと強く思った。

将来、胸を張って「手話通訳士です」と言える日を迎えるために、今できることは手話を覚えること、耳の不自由な人々の不便を知ることだ。

私は手話を覚えるために、自分の好きな曲を手話に訳している。自分の好きな曲だと、自然とテンションも上がってくる。手話に訳す時は、手話辞典を使っている。これらを含め、私にできることは全てやって貢献したい。

（福山市）

（2023年1月26日木曜日）

心理カウンセラー

木村 來夢
福山市立道上小出身

今できること 最大限

中学生 木村 來夢 13歳

私は悩みを抱えている人が笑顔になれるような心理カウンセラーになりたいと思っている。

初めて自分で買った小説の登場人物の中に、心理カウンセラーがいた。この時、この職業を知った。その人物は悩みを抱える人にそっと寄り添い励ましていた。そんな姿に憧れた。

それからいろいろと調べてみた。専門知識を身に付けることや、資格の取得も必要になる。心理カウンセラーはどちらかというと「理系」なのだそうだ。

私はまだ、中学生だ。できることに限りがあるかもしれない。だが、今、自分が「できる」を最大限で頑張ろうと思う。

まずは苦手な数学からだ。できるようになるまで、問題を繰り返し解く努力をしたい。数学ができるようになったら、理科や英語など、できる教科をどんどん増やしていきたい。

（福山市）

（2023年1月20日金曜日）

小学校教師

上田 芽以
福山市立千田小出身

授業楽しい教師が夢

中学生 上田 芽以 13歳

私には夢があります。それは楽しく分かりやすく教えることができる小学校教師になることです。

小学4、5年生のときの担任の先生との出会いがきっかけでした。授業は楽しく、分かりやすく、そして覚えやすかったです。

6年生のときは、社会科の担当教師でした。特に印象に残っている授業は歴史です。ここでは、自分で調べ、それを自分の言葉に置き換えて理解するという方針でした。

先生は児童が調べた資料をまとめ、簡潔に説明もしてくださいました。それによって、自分でできたという達成感と歴史の知識を与えてくれました。

教師になるにはコミュニケーション力が必要だと聞いたことがあります。だから、たくさんの人と話し、自分が持っている能力をさらに伸ばしていきたいと思います。教師になったら、みんなが勉強を好きになってくれるような授業に挑戦したいです。

（福山市）

（2023年1月13日金曜日）

薬剤師

浜田 紗羽
福山市立駅家小出身

寄り添える薬剤師に

中学生 浜田 紗羽 13歳

私は患者さんの心に寄り添える薬剤師になるという決意をした。そうなりたいと思ったきっかけは、病院薬剤師を主人公にしたドラマを見たことだ。

私は医療従事者である母の姿を見て、同じように医療の現場で役に立ちたいと思っていた。しかし、血液を見るのが苦手な自分に、そんなことができるだろうかとも感じていた。

そんな時、このドラマを見て、とても魅力的な仕事だと感じた。そして、これならば自分でも役に立てるかもしれないとも思った。

そのためには、コミュニケーション力を養うことが大切だ。患者さんの心に寄り添える薬剤師になれるよう頑張りたい。

そして、この夢をかなえることができたら、薬の開発にも挑戦し、血が苦手でも医療現場で役に立つことができるということを世の中の人たちに伝えたい。

（福山市）

14歳 憧れの人に手紙を書こう！

２年生は読書科の授業で『14歳からの仕事道』を読みます。作者の玄田有史先生（東京大学教授）は労働経済学を専門で、「希望学」という学問を提唱された方として知られています。盈進でも2017年12月にホンモノ講座の講師としてお招きし、中学生に向けて自分のなりたいもの、ありたい姿に近づくためにどのように考えたり行動したりすればいいのか語って頂きました。3年生で取り組んでいる修了論文においてフィールドワークを取り入れることになったのは玄田先生の教えがヒントになっています。探究の授業で作成した「This is my dream job!」とコラボレーションし、憧れの人に手紙を書くという取り組みをおこなったところ、たくさんの「ホンモノ」たちからお返事を頂くことができました！以下に一部を紹介します。

玄田有史先生講演会の様子

プロサッカー選手
元サッカー日本代表
川澄 奈穂美さん
から直筆のお返事を頂きました！

庭師
俳優・タレント
村雨 辰剛さん
からサイン本を頂きました！

プリマバレリーナ
文化功労者
森下 洋子さん
からお返事を頂きました！

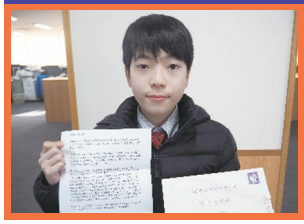
順天堂大学　教授
保健医療学部療法学科副学科長
高橋 哲也さん
からお返事を頂きました！

広島大学大学院 教授
医系科学研究科 小児看護開発学
祖父江 育子さん
からお返事を頂きました！

㈱久保田運動具店
代表取締役
久保田 勝行さん
からお返事を頂きました！

㈱ミリアルリゾートホテルズ
代表取締役会長
髙野 由美子さん
からお返事を頂きました！

獣医師
インフルエンサー
豊田 陽一さん
から動画メッセージを頂きました！



ソフトウェア技術者
プログラミング言語Ruby開発者
まつもと ゆきひろさん
からお返事を頂きました！

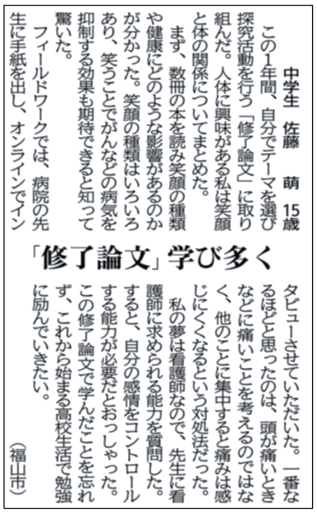
音楽プロデューサー
編曲家・作曲家・作詞家
蔦谷 好位置さん
からお葉書を頂きました！

15歳 修了論文 ～書くことは考えること～

読書科の授業では「自己」⇒「社会」⇒「世界」と視野を広げていき、中学修了時には再び「自己」へと回帰するサイクルの読書活動を通じて「未来を見つめる15歳」の育成を目指しています。中学3年生では、興味・関心に基づいたテーマを自ら設定し、4000字以上の本格的な論文に挑戦。専門的な本を読み、自ら調べ、担当の先生の指導を受けながら半年以上かけて論文を書き上げます。主体的な学びを通して思考力を鍛えることで「21世紀型能力」の礎を築くとともに、自分のやりたいこと、なりたい姿を思い描くことができます。

2022年度修了論文テーマ例

- 「脳死と生命倫理」
- 「宇宙旅行の可能性」
- 「コロナとネット通販」
- 「映画と地域振興」
- 「音楽教育の必要性」
- 「文房具とSDGs」
- 「幼児期の電子機器使用による影響」
- 「薬の種類と飲み合わせ」
- 「ゲーム依存症とその原因」



中学生　佐藤　萌　15歳

この1年間、自分でテーマを選び探究活動を行う「修了論文」に取り組んだ。人体に興味がある私は笑顔と体の関係についてまとめた。

まず、数冊の本を読み笑顔の種類や健康にどのような影響があるのかが分かった。笑顔の種類はいろいろあり、笑うことでがんなどの病気を抑制する効果も期待できると知って驚いた。

フィールドワークでは、病院の先生に手紙を出し、オンラインでインタビューさせていただいた。一番なるほどと思ったのは、頭が痛いときなどに痛いことを考えるのではなく、他のことに集中すると痛みは感じにくくなるという対処法だった。

私の夢は看護師なので、先生に看護師に求められる能力を質問した。すると、自分の感情をコントロールする能力が必要だとおっしゃった。この修了論文で学んだことを忘れず、これから始まる高校生活で勉強に励んでいきたい。

（福山市）

「修了論文」学び多く

中国新聞2022年3月22日

中学生　高橋　湊介　15歳

中学3年間の探究活動の集大成の論文をまとめた。K-POP、とりわけBTS（防弾少年団）が好きなので、詳しく調べたいと思い、テーマにした。

世界中で人気を集めた理由が分かった。楽曲の素晴らしさとストーリー性を持つアルバムや圧倒的なダンスパフォーマンスだ。それと才能と個性あるメンバーの絆だ。

調べていくうちに、日本と韓国の文化の交流について考えるようになった。戦後、日本では韓国の文化に対する興味や、歴史に対する認識が薄い時代が続いたが「冬のソナタ」をはじめとする韓国ドラマが紹介されると、韓国の言語や文化に対する関心が高まった。

今や、芸能分野を中心に韓国文化に触れない日はないほどだ。日本と韓国はお互いに未来志向的な考えを持ち、友好を深めるとともに、世界の中におけるアジアの連帯も果たしていくべきだと思う。

（福山市）

日韓交流 未来志向で

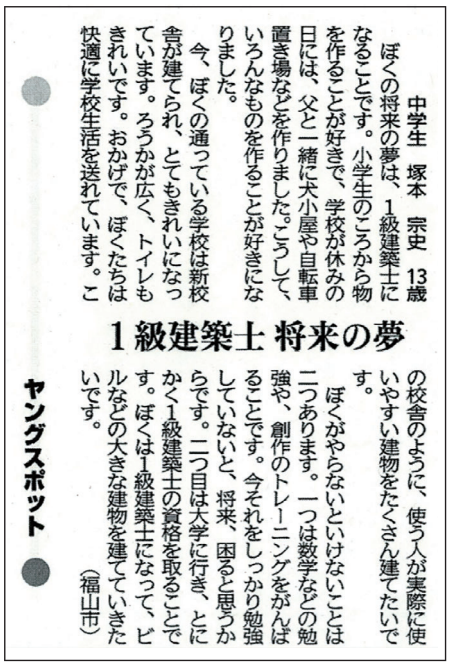
中国新聞2022年3月29日

この修了論文の執筆の際には、夏休み中に自分で計画したフィールドワークをおこなうことになっています。自分の調べたい内容についてより高度な知識を持つ専門家や、文化的・技術的な関連性の見られる企業などを訪問したり、手紙やメール等でのやりとりをしたり…手法はさまざまですが、自分の研究を深めるために「ひと」にアプローチします。もちろん本はそれを読むことで愉しみをもたらしてくれるものですが、本から一歩飛び出して、現実社会とのつながりが生まれ、そこに「ひと」との出会いが生まれるとより豊かな喜びを生み出してくれるものです。「読書科」の目指す学びの完成形は、今その価値が注目される「探究」的学びそのものだと言えるでしょう。

また修了論文を書き終えた中学3年生は中学2年生に向けて全員がプレゼンテーションをおこないます。先輩から後輩に引き継がれる伝統の行事です。コロナ禍でさまざまな制限がある中、本校ではICT環境の充実により、ZOOMを用いたインタビューやオンラインプレゼンテーションなど、その内容をさらに発展させながら取り組みを継続しています。

Special Report 2 建築家 隈研吾さんに会いたい！

2022年3月26日　隈研吾都市建設設計事務にて



ヤングスポット

1級建築士 将来の夢

中学生　塚本　宗史　13歳

ぼくの将来の夢は、1級建築士になることです。小学生のころから物を作ることが好きで、学校が休みの日には、父と一緒に犬小屋や自転車置き場などを作りました。こうして、いろんなものを作ることが好きになりました。

今、ぼくの通っている学校は新校舎が建てられ、とてもきれいになっています。ろうかが広く、トイレもきれいです。おかげで、ぼくたちは快適に学校生活を送れています。この校舎のように、使う人が実際に使いやすい建物をたくさん建てたいです。

ぼくがやらないといけないことは二つあります。一つは数学などの勉強や、創作のトレーニングをがんばることです。今それをしっかり勉強していないと、将来、困ると思うからです。二つ目は大学に行き、とにかく1級建築士の資格を取ることです。ぼくは1級建築士になって、ビルなどの大きな建物を建てていきたいです。

（福山市）

2020年2月27日木曜日　中国新聞朝刊

中学３年間の読書・探究におけるドリームプロジェクトの取り組みを通して、自分自身を見つめ、これからの自分の夢を思い描きながら、それを少しずつカタチにしている生徒の１人を紹介します。

現在高校2年生の塚本宗史君の将来の夢は「建築士」。小学４年生の頃から漠然と思い描いてきたこの夢を中学生になっても持ち続けた塚本君は、中学１年生の探究で以下の「ドリームキャンバス」を制作しました。

中学2年次制作　「This is My dream job」

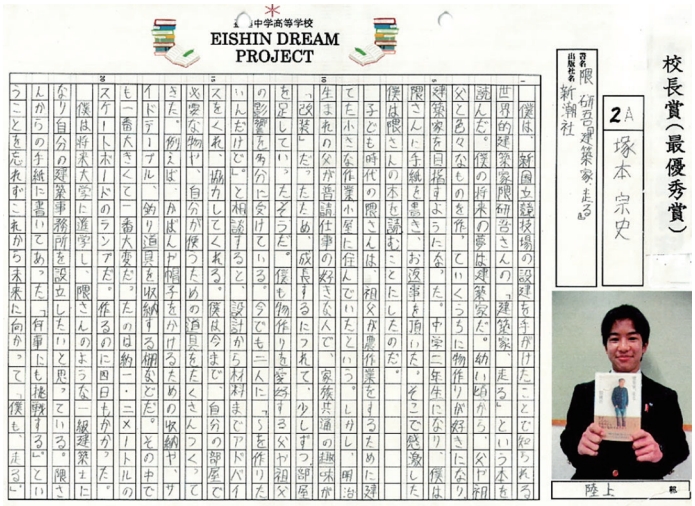
また、１年生の終わりには自身の夢について文章を書き、「中国新聞ヤングスポット」に投稿・掲載されました。中学２年生になり、将来の夢について深く考え始めた塚本君は「隈研吾さん」という世界的建築家を知ります。ちょうど開催が予定されていた東京オリンピックの目玉である新国立競技場の建設を担当された世界的建築家です。

『１４歳からの仕事道』を読んで早速隈さんに手紙を書いた塚本君は、隈さんから１枚のポストカードを頂きました。隈さん直筆の激励のメッセージが書かれてあり感激。隈さんへの憧れの気持ちはどんどん高まっていきました。

頂いたカード

そこで塚本君は隈さんの書かれた『建築家、走る』という本を読み、隈さんの建築にかける熱い思いをさらに深く知ることになります。この本をもとに塚本君が書いた読書感想文は、校内読書感想文コンクールにおいてみごと、「校長賞」を受賞しました。

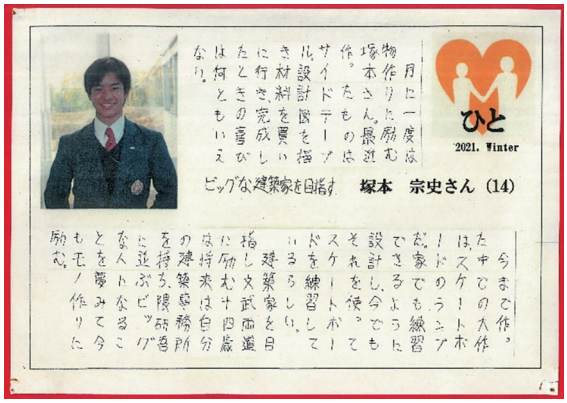
校内読書感想文コンクール　校長賞



校長賞（最優秀賞）

2A　塚本　宗史

校内読書感想文コンクール　校長賞



ひと　2021. Winter

ビッグな建築家を目指す　塚本　宗史さん（14）

2年生の終わりに探究の授業で取り組んだ「ひと」欄作りの際にも「ビッグな建築家を目指す」と書き、中学最後の読書科の取り組みである修了論文のテーマも「建築」にすると決意。そしてやはり憧れてやまない「隈建築」について調べることにしました。論文タイトルは「建築家、隈研吾に会いたい」。隈さんの書かれた本や、隈さんについて書かれた本を大量に読みました。ちょうどその年に14歳の世渡り術シリーズに『建築家になりたい君へ』が出版され、この本も活用しました。

塚本君の修了論文は2021年度「特別賞」を受賞しました。それは同じような夢を持つクラスメイトや、テーマに共通項目が見られるクラスメイトと一部共同で執筆するという新しい探究のかたちで取り組んだ意欲的な論文だったからです。そしてついに、完成した論文を建築家、隈研吾さんに送り届けることになりました。修了論文は12月の終業式までが清書提出期限なのですが、塚本君は同じ時期に隈さんに送付。すると年末に隈さんからメールが届きました。　――「塚本君の論文に心を打たれました。僕の事務所で面会しませんか。少しでも彼の励みになればと思います。」――

オミクロンの流行もあり、蔓延防止法がやっと解除された3月末、東京港区にある隈さんの事務所を訪問。この論文のタイトルに込めた塚本君の夢の1つが実現した瞬間です。

盈進中学校読書科の学びは、探究をはじめとするさまざまな学びと連動しながら、生徒1人1人の夢の実現につながるまさにドリームプロジェクト。盈進ではこのプロジェクトにすべての教員が関わり、生徒の夢を温かく応援しています。

　あなたの夢は何ですか？

　盈進の読書科で学び、あなたの夢を一緒に実現してみませんか？

隈さん建築の国立競技場も見学しました

隈さんから写真集をプレゼントして頂きました

Special Report 3

作曲家 阿部海太郎さん来校！

―2023年度 2度目のホンモノ講座への来校決定！―

1冊の本との出会いが、さまざまな出会いを生み出す盈進ドリームプロジェクト。2021年11月22日にはホンモノ講座が開催されました。今回お招きした講師はNHKの人気番組「日曜美術館」のテーマ曲をはじめ、数々の舞台音楽を手掛けておられる、作曲家の阿部海太郎さん。講演タイトルは「音楽、その語り得ないもの」です。

海太郎さんは映画『ペンギン＊ハイウェイ』の音楽も担当されておられ、中学生はフリーラーニングデイに全員で映画鑑賞をしました。

《阿部海太郎さん 最新情報》
2023年度前期 NHK連続テレビ小説
「らんまん」音楽担当 決定！

ぼくはまだ小学校の四年生だが、もう大人に負けないほどいろいろなことを知っている。毎日きちんとノートを取るし、**たくさん本を読む**からだ。**知りたいことはたくさんある**。宇宙のことに興味があるし、生き物や、海や、ロボットにも興味がある。歴史も好きだし、えらい人の伝記とかを読むのも好きだ。ロボットをガレージで作ったことがあるし、「海辺のカフェ」のヤマグチさんに天体望遠鏡をのぞかせてもらったこともある。海はまだ見たことがないけれども、近いうちに**探検に行こう**と計画をねっている。**実物を見る**のは大切なことだ。百聞は一見にしかずである。

（森見登美彦『ペンギン＊ハイウェイ』より）

また中学１年生の読書科では森見登美彦さんの原作をリレー読書しました。分厚いハードブックですが、物語の展開に引き込まれて一気に読み上げる１年生たち。読まれた本は次から次へとリレーされていきました。

校内には毎朝海太郎さんの音楽が流れ、読書の秋、芸術の秋も深まっていきました。創作の授業では読書とは？映画とは？音楽とは？について生徒たちが格言を考え、それをアート作品に仕上げます。読書のおもしろいところが、さまざまな教科がコラボレーションできるところです。

当日は海太郎さんの用意してくださったワークショップや映像なども交えながら、音楽の世界にどんどん引き込まれていく中学生たち。海太郎さん自身によるピアノ演奏「手」には会場全体の空気がピンとはりつめ、息を止めるくらい集中して聴いている姿が見られました。さらに海太郎さんは、音楽部のために映画『ペンギン＊ハイウェイ』の楽曲「夏休み」の楽譜をオーケストラバージョンから吹奏楽バージョンへと作り直してくださって、プレゼントしてくださいました。そこで、海太郎さん指揮によるセッションも実現できたのです。
「文学×映画×音楽」 学校全体がアートの織り成す三重奏に包まれました。

《生徒の感想から》

海太郎さんがお話してくださったエピソードのどれもが興味深く、学ぶことがたくさんありました。弾いてくださったピアノもとてもキレイな音で、目を閉じると目の前に景色が浮かんでくるようでした。私は演奏の最後になる、ピアノの１音が静かに空気の中にとけていく瞬間が好きで、今日もそこに集中して聴きました。（１年生）

海太郎さんのお話は音楽を全く知らない僕が聞いてもとても面白いものでした。特に音楽部を指揮された演奏は鳥肌が立ちました。もともと「夏休み」は僕の好きな曲調でしたが、より一層特別感の増した曲になりました。海太郎さんのピアノはとても繊細な音で、今でも体の奥底でその音が響いているようです。（１年生）

毎朝学校で流れている「ペンギン＊ハイウェイ」の挿入曲は、とても爽やかな曲調で、聴くと心がすっきりとします。私たちの身近にある「音」とは何なのか、どういうふうに感じられるものなのかを学ぶことができました。吹奏楽部の演奏もとても素敵なものでした。これから先も音楽と共に生きたいなと思いました。（２年生）

私は音楽部でオーボエをやっています。今回海太郎さんとコラボすることができて嬉しかったです。楽譜が配られた時、連符や音域に少し不安を持っていましたが、曲のワクワク感や壮大さに虜になってしまい、練習していて楽しかったです。海太郎さんが指揮を振っている間、実はとても緊張していましたが、想いのこもった指揮が緊張を解し、笑顔で吹ききることができました。（２年生）

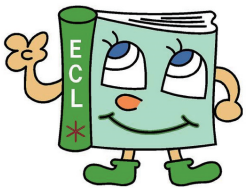
自分にとって１番心に残っている音って何だろう、と考えました。初めて嵐のライブに行ったときのファン全員の歌声、何度も失敗した水泳の飛び込みの水に落ちる音、ベルリラをトランペットの人たちと一緒に初めて合わせた時など、たくさん思い浮かびました。音は消えてしまうけれど、心に残っている音はたくさんあります。感動も悔しさも喜びも、どの思い出にも風景、そして音があることが、今日とてもよくわかりました。（２年生）

盈進図書館
みどりのＥＣＬ
～ Eishin Community Library ～

地域に愛され　地域と共に
こころを育み　出合いと学びを創出する
知の集積地　知の発信地

2019年度、盈進中学高等学校は新校舎での学びをスタートしました。その「顔」とも言えるエントランスには、従来の約３倍の大きさの新図書館が位置づけられています。新しい本も6000冊加わり、「知の集積地・発信地」として、さまざまな場面で盈進生の学力のベースを育む読書活動を支えます。
また、新図書館の建築には、伝統の「読書科」の学びを生かした工夫が施されています。あわせて生徒には１人１台のタブレットICT環境が整い、この新図書館を中心とした探究活動がさらにパワーアップ！

新図書館には盈進に通う生徒・保護者、そして将来的には地域に開けた出合いの場となるように、「みどりのECL」という親しみやすい愛称がつきました。「いーくる」という呼び名は「Eishin Community Library」の略語であり、「盈進に『来る』」という掛詞にもなっています。あわせて図書館オリジナルのマスコットキャラクター「盈図（えいと）くん」も誕生し、図書館で行われるさまざまなイベントに登場します。愛称・キャラクター名・デザインともにすべて校内の生徒による発案です。これは、「みどりのECL」の主役は生徒１人ひとりであり、生徒たちの手によってこの図書館が作られていくことを意味しています。



EISHIN NEWS

読書部ニュース!

本物のヨシタケシンスケ展を鑑賞しました!

初めての感謝祭展示「あるかしら図書館〜ヨシタケシンスケ大研究」が大成功!

盈進に新設された「読書部」が本格的に始動し1年が経過しました!部員も増員し、自慢の図書館みどりのECLを拠点にステキな活動を展開中!ここで紹介します!

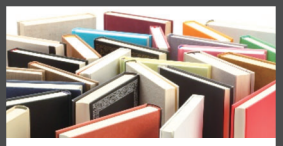
#盈進読書部インスタ開設!

Instagram

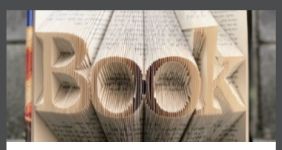
BEST CULTURE賞を見事受賞!

読書部の活動内容

本のあるステキな場所へ行こう



本と関わるステキな人に会おう



本のあるステキな空間を作ろう

TO DO LIST

- 本をめぐる旅
- 読書会をひらく
- イベント企画
- オリジナルグッズ作り
- 本の作者に会いたい
- ブックハントに出かける
- 学校中に本を
- …まだまだいっぱい!

読書会で読んだ『仕事で大切なことはすべて尼崎の小さな本屋で学んだ』の作者川上徹也さんと小説のモデルになった小林由美子さんが会いに来てくださいました!

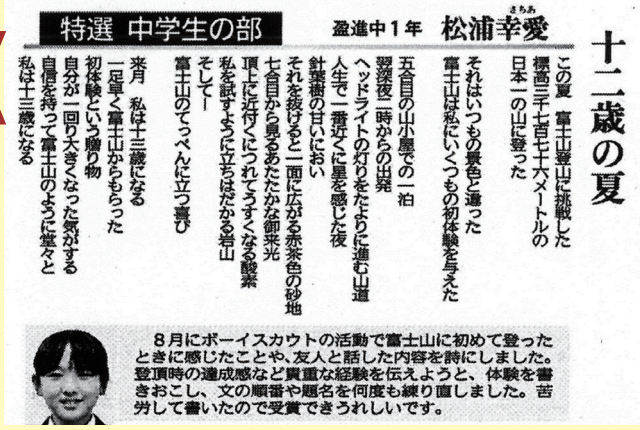
WELCOME TO EISHIN READING CLUB★

中国新聞の取材を受けてドキドキ!

生徒の活躍 ～表現力を磨く～

盈進中学校の読書科で培った「読む力」「書く力」を発揮し、生徒たちはいろんな「伝え方」で自己表現をします。ここでは2022年度に生徒が挑戦した作品の一部をご紹介します！

第21回 木下夕爾賞



特選 中学生の部　盈進中1年　松浦幸愛（まちあ）

十二歳の夏

この夏　富士山登山に挑戦した
標高三千七百七十六メートルの
日本一の山に登った

それはいつもの景色と違った
富士山は私にいくつもの初体験を与えた

五合目の山小屋での一泊
翌深夜二時からの出発
ヘッドライトの灯りをたよりに進む山道
人生で一番近くに星を感じた夜
針葉樹の甘いにおい
それを抜けると一面に広がる赤茶色の砂地
七合目から見るあたたかな御来光
頂上に近付くにつれてうすくなる酸素
私を試すように立ちはだかる岩山
そして―
富士山のてっぺんに立つ喜び

来月　私は十三歳になる
一足早く富士山からもらった
初体験という贈り物
自分が一回り大きくなった気がする
自信を持って富士山のように堂々と
私は十三歳になる

8月にボーイスカウトの活動で富士山に初めて登ったときに感じたことや、友人と話した内容を詩にしました。登頂時の達成感など貴重な経験を伝えようと、体験を書きおこし、文の順番や題名を何度も練り直しました。苦労して書いたので受賞できうれしいです。

ふくやま文学館と中国新聞備後本社が主催し、福山市が生んだ詩人「木下夕爾」を顕彰するためにもうけられた木下夕爾賞は、小中学生を対象に詩作を募集し、21年目を迎える歴史あるコンテストです。今年度は3部門（小学校低学年の部・高学年の部・中学生の部）で2960点の応募があり、中学生の部448作品の中から中学1年生の4名の生徒が入賞し、松浦幸愛さん（福山市立深津小学校出身）が特選（第1位）受賞、あわせて2年連続の「学校賞」も頂きました。

学校賞　緑丘小・大津野小・盈進中

工夫凝らし表現力磨く

学校賞には、いずれも福山市の緑丘小、大津野小、盈進中の3校が選ばれた。各校は校内の掲示で児童の詩への興味を誘ったり、日々の授業や行事の感想文をこまめに書いたりして表現力を磨いている。

初受賞の緑丘小では、季節や世相に合わせ、児童が書き写した詩を昇降口に掲示している。昨年度からは給食時の校内放送で、児童や教諭が読み聞かせをする時間を設けた。担当する図書館補助員宮内美千代さん(59)は「詩や物語に触れる機会を増やし、表現力や想像力を養った」と話す。

大津野小は2年ぶりの受賞。すべての授業の後に振り返りの時間を設け、感想や学びをプリントに記入。学習発表会などの後にもメッセージを他学年の児童に贈って、自分の思いや意見を書く力を鍛えている。

2年連続受賞の盈進中は、詩作の際に、テーマに関連する言葉をワークシートに書き出し、イメージを膨らませた。授業では生徒が書いた文章を班で回覧し、表現の上手な生徒の技法を共有した。

校内の詩の掲示に見入る緑丘小の児童

「飛び込め」　千鶴 龍馬（尾道市立御調西小学校出身）

夏がきた

海に飛びこむ
空みたいな
広く青く澄んだ海へ
飛びこんだ瞬間
ぼくの世界は波の音だけになる
海面から顔を出し上を見ると
広い空がさらに大きく感じる

夏がきた

川に跳びこむ
森みたいな
静かなエメラルドに輝いた川へ
跳びこんだ瞬間
ぼくの世界は泡の音だけになる
川面から顔を出し上を見ると
木々の間からもれる陽の光が
さらにまぶしく感じる

「未来に向かって」　重政 歩花（福山市立御野小学校出身）

今日は、晴天
太陽がジリジリと照らす
もう夏だ
庭のヒマワリが
太陽だけ見つめている
まるで、目標に向かって頑張っている自分のよう
今日は、くもり
太陽は休憩中
ヒマワリは少し元気がなさそうだ
まるで、小さなコトに悩む自分のよう
そんな時、ヒマワリは何を考えているのか
今日は、雨
ヒマワリは、元気がなくショボンと悲しんでいるよう
まるで、将来のコトで悩んで苦しんで行き詰まって
不安で心が押し潰されそうな自分のよう
こんな時、ヒマワリは何を待っているのだろう
きっと、夜が明けて朝日を待ちわびているのだろう
まるで、自分の未来が現実になるのを待ちわびているよう
庭のヒマワリが太陽を見つめるように今日も頑張っていこうと思った

「ほおずき」　道下 若奈（福山市立霞小学校出身）

夏の日差しがギラギラ照りつける
太陽の光がジリジリ焼きつける
庭の片すみでひときわ目をひくオレンジ色
ほおずき
直射日光が地面をガンガンたたきつける
光と影が遠くをユラユラと見せてくる
暑さに負けず灯ろうのように光り輝く
ほおずき
暑さにやられしょんぼりしている植物
暑さにつかれ力をなくしている人々
遠くがゆがんで見える
高くのぼる木々の陰　あざやかな光を放ち
日差しをはね返す
気づかれない場所でひそかにエールを送る
灯ろうの光を勇気に変えて
あざやかな光を力に変えて

第74回 鈴木三重吉賞

広島市出身の児童文学作家鈴木三重吉にちなんで、中学地方の小中学生を対象に作文と詩を募る伝統的なコンクールにおいて、中学2年生の尾坂絆吏君（福山市立神辺小学校出身）が優秀賞を受賞しました。今回の詩の応募総数は2375点。中学生で受賞するのは36作品（特選1、優秀賞3、佳作32）のみです。

「僕は、新しい僕になる」

尾坂 絆吏

七センチメートル
待ちに待った
中学二年生の身体測定
僕の身長は伸びていた
なんと七センチメートルも

まったく気づかなかった
いつの間にこんなに伸びたのか
気持ちよく眠っていた間にだろうか
ご飯をおかわりしていた間にだろうか
この七センチメートルの中に
いったい何が詰まっているんだろう

この七センチメートルの間で
できるようになったこと
数学の因数分解が解けるようになった
英語で未来のことが話せるようにもなった
今まで読んだことのないくらいの
分厚い本が読むことができた
それから
野球の試合で
初めてのヒットが打てるようになった

今年のうちにあと十センチ
あと十センチ伸びたら
できるようになること
図書館の本棚の高いところに
手が届くかもしれない
野球グラウンド全体が
見渡せるかもしれない
それから
もしかしたら
ちょっとだけモテるかもしれない

一か月ごとに
一週間ごとに
一日ごとに
一時間ごとに
一分ごとに
一秒ごとに
気づかないうちに伸びる僕の身長

そうだ
僕は毎日新しい僕になっているんだ

「棋道部の放課後」

渡辺 日棚

ルービックキューブを手に取る
まずはウォーミングアップだ

白と黄色を軸にして
2×2×2
3×3×3
ダイヤに三角、正方形
それらが織りなす立方体
白と黄色を軸にして
赤、青、緑や橙が
目まぐるしく回転する
そうして今まさに
美しい世界が完成した

続いて始まるストラテゴ
嵐の前の静けさの中
最初に2を飛ばし
敵の旗めがけて一気に進む
これまで培った経験値に加え
僕の采配が試される
そうして今まさに
熱戦は幕を閉じた

僕たちの前には新たなボード
8×8の正方形
市松模様の盤上で
騎馬と女王が踊り狂う
敵の陣地へ入り込み
王へ近づく女王
兵士を倒す騎馬
疾風のごとき速さで
王を追い詰める

夕日に染まる部室の中
そこにいる全員が
盤上で睨みをきかせる

機は熟した
一日を終える合図だ
中段へ腕を上げ
そして同時に咆哮する
「チェックメイト！」

伊藤園おーいお茶 第33回新俳句大賞

盈進中学校では毎年冬休みの課題として伊藤園の新俳句大賞に挑戦しています。これは過去の応募総数4100万句を超える、日本最大級の俳句コンテスト。第33回は応募総数は194万6459句の中から、過去最高の8名の生徒が入賞を果たしました。なお「佳作特別賞」3名の作品はパッケージに掲載されています。

《佳作特別賞の作品》

君の背中　食らいついて　走る夏
安田 勇翔（福山市立道上小学校出身）

青空に私の口から雲ひとつ
宮武 美優（福山市立日吉台小学校出身）

七輪に乗ったサンマと目が合った
大島 弓依（福山市立旭小学校出身）

第22回 みんなの新聞コンクール 新聞感想文の部

2001年にスタートした「みんなの新聞コンクール」は子どもたちが新聞に親しみながら言葉の力や表現力、考える力を養ってほしいとの願いのもとでおこなわれている中国新聞社主催のコンクールです。22年目の今年の応募総数は11014点で、5部門の特別賞と入選・佳作に計462点が選ばれました。

2年生は読書の授業で「新聞感想文」に取り組み、自分で選んだ新聞記事について考察を加えた感想文を書いています。「コロナ禍のマスク生活」や「交通安全」「災害時の避難方法」「フードロス問題」などの社会問題について体験をまじえて自分なりの考えをまとめた4名の生徒が入賞を果たしました。これからも本や新聞に積極的に触れ、考えるきっかけを見つけていきたいものです。

【入選】	2年	吉川	心優（福山市立千田小学校出身）	「マスクのある社会、ない社会」
【佳作】	2年	村上	茅南（尾道市立向島中央小学校出身）	「行動することの大切さ」
【佳作】	2年	足立	美咲（福山市立曙小学校出身）	「家族を守るために」
【佳作】	2年	片山	悠生（井原市立大江小学校出身）	「『いただきます』の心を大切に」

第2回 お気に入りの一冊をあなたへ 読書推せん文コンクール

『はてしない物語』

すすめたい相手　本心をうまく伝えることができない人へ

四辻佳穂（広島県）
盈進中学校1年生

『はてしない物語（上下巻）』
ミヒャエル・エンデ／作
上田真而子、佐藤真理子／訳
岩波少年文庫

あなたは本心をうまく伝えることができますか。もし伝えることができないのなら、この本がおすすめです。

この本はバスチアンという、ひっこみじあんの少年が自分は何をしたいのかを本を読みながら考え見つけていくという物語です。

私は、今年地元の小学校の友人達と別れ、私立中学校に入学しました。他の人と仲良くなりたい一心で本心を隠し、他人の意見を尊重してばかりでした。しかし、この本を読んで本当の自分と付き合うことの大切さを学ぶことができたと思います。

自分の本心は何なのか、まだよく分からない。そんな人は、ぜひバスチアンと一緒に探してみてはどうですか。

公益財団法人 博報堂教育財団主催による第2回「お気に入りの一冊をあなたへ 読書推せん文コンクール」において、中学校1～3年生全員で取り組んだ結果、1年生の四辻佳穂さん（写真右：福山市立手城小学校出身）が個人賞を受賞しました。またあわせて盈進中学校は団体賞も頂きました。

このコンクールは子どもたちの読書機会の拡大を目的に2020年から開催されたもので、第2回となる今回の大会には団体応募数406団体、個人応募数25377作品が寄せられました。（団体賞は全国で48団体、個人賞は全国で118名が受賞しています）

学校全員で本を読む文化を大切にしている盈進中学校にとってうれしい入賞のお知らせです。

盈進中学校 校内読書感想文コンクール

盈進中学校では、2020年度より校内読書感想文コンクールを実施しています。このコンクールは、朝読書や読書の授業などで読んだ本についての自分の思いや考えを文章化するもので校長賞をはじめ、各クラス担任賞さらにはクラブ顧問賞まで用意してある盈進のビッグイベントになっています。2022年度は柴田柚希さん（福山市立旭小学校出身）の作品「わたしがつくる未来」（『ミライの授業』（瀧本哲史著）の感想文）が校長賞ならびに2年B組担任賞をダブル受賞し中国新聞の「青春文学館」にも掲載されました。

多目的ホールに全作品を掲示します

青春文学館

自ら未来を描く大切さ

柴田 柚希（盈進中3年）

ミライの授業

瀧本哲史著（講談社）

「未来を予測する最善の方法は、それを発明することだ」。計算機科学者アラン・ケイの言葉だ。パーソナルコンピューターの父といわれる彼の考えに疑念を抱いた私は、この本から未来をつくる大きなヒントを得ることになる。

登場する偉人の中でも、2015年にノーベル生理学・医学賞を受賞した大村智さんのエピソードが印象的だ。彼は大多数が追い求めている分野にはあえて飛び込まず、誰も足を踏み入れていない場所に着目する。世界中の研究者が心血を注ぐ創薬研究において、動物用の薬が人間用として役立つかもしれないという信じられない仮説を立て、大きな宝を掘り当てた。

私はみんなと同じ、似ている考えに近づけてしまうことがある。確かに他者と意見を共有できる場所は安全な領域だ。しかし私だけが見つけることのできる発見はそこには存在しない。

タブレットなどの情報通信技術（ICT）機器を使う授業が当たり前になった「今」は、かつて「未来」をつくった人がいたおかげで存在する。時代と共に世界も、私たちの生き方も変わっていくのだ。

そんな「今」を生きる私の夢は教員になること。「子どもたちの」未来をつくる職業だと思われがちだが、教員は「子どもたちと共に」未来をつくる仕事であり、私も「未来をつくる」存在になれるのだ。私は誰かのつくったみんなと同じシナリオではなく、自らの手で未来のシナリオを描くことにこそ、大きな意味があると強く信じている。

随時掲載します

中国新聞　青春文学館
2023年4月2日朝刊掲載

私の盈進読書科 ～卒業生の声①～

《2021年度高校3年生》

酒見 知花（福山市立湯田小学校出身）

明治大学 文学部
（心理社会学科臨床心理学専攻）へ進学

［私をつくった10冊］

1冊の本に人生をまるごと変えてしまう力がある――偉人たちの残したことばの中には本の持つ力について言及したものが少なくありません。盈進の読書科はそうした本の持つ力を信じ、本と出合うチャンス、本が大好きになる仕掛けをたくさん用意しています。瑞々しい感性に満ちた10代で出合った本たちは、きっと人生においてかけがえのない宝物になることでしょう。盈進の読書科で学んだ「読むこと」「書くこと」を通してどのように未来を切り拓いたのか、卒業生の酒見知花さんが「私をつくった10冊」を紹介します。

❶きっかけの1冊『キュリー夫人』

小学3年生の時、学校の廊下にあった本棚に伝記が数冊あり、なんとなく手に取った本でした。キュリー夫人の幼少期から亡くなるまでの人生、そして夫人亡きあとの状況まで細かく書かれていることに驚きました。彼女の偉業だけに焦点が当てられていないからこそ、人間らしさを感じて面白くって。分厚い本であったのにも関わらず、授業が始まったことにも気づかないくらい夢中で読んでいる自分がいました。それからは、ヘレンケラーやナイチンゲールなど、本棚にあった伝記を片っ端から読破し、さらに本を求めて図書室に通うように。図書室の目立つ場所に漫画で描かれた伝記はいっぱいあったのですが、図書室の一番奥、埃が舞っていそうなところにある活字だらけの伝記を「全部私が読む！」なんて意気込み、名前も知らない人の伝記まで読むことも…『キュリー夫人』は本を読み終えることの達成感と「ひと」への好奇心をかき立ててくれた思い出深い1冊です。

❷読書の授業で再読し新たな発見をした『100万回生きたねこ』

保育園の時から祖母に紙芝居や絵本をよく読んでもらっていて、この本も5歳の時に1度読んだことがありました。当時は「この猫、なんども生き返って羨ましいな」なんて思ってはいたものの、はっきりとしたハッピーエンドで終わらなかったことが記憶の片隅に残っていました。中学生になって授業で絵本を読むことにも驚きましたが、読み直しのつもりで読んだ『100万回生きたねこ』は、「あれ、こんな物語だったけ？」と思うほど全く違う物語でした。100万回生きることよりも愛する人との1回きりの人生がこの猫にとっての「幸せ」のかたちなのかな、と感じたとき、どんなプリンセスが出てくる物語よりもロマンチックに思えて仕方なかったのです。年を重ねるごとに絵本の奥深さ、面白さが変化していくこの本は大人からも子どもからも愛される稀有な本であることは間違いありません。

❸集団読書本ナンバー1『卵の緒』

さっぱりとして大胆な母親と、年齢よりも少し大人びている主人公の軽快なやりとりで繰り広げられる物語に、先生の声が聞こえなくなるくらい夢中になって読みふけっていました。「再婚」「血の繋がらない親子」「不登校」というマイナスイメージを持つ言葉ですら日常の一コマに自然に溶け込んでいて、斬新で不思議な本です。私自身の家族とも重ねてみたりしながら、本の中に出てくる母親の「大好きよ」という言葉と親子の関係性、主人公の考え方にどこか救われた気がしました。心がほかほかする気持ちになった初めての本でもあり、今でも度々読み返したいほど大好きな作品です。

❹500ページを超す長編小説『赤ヘル1975』

自分だったら選ばない本を読む機会を与えてくれるところも、読書の授業のいいところ。私は中学生まで読書は好きでしたが、エッセイやノンフィクションなどの類は読まず嫌いをしていました。だからこの本はちょっと苦手なジャンルでした。とっても分厚いので、最初にみんなで少し読んでからある程度ページが進むと自分で読み、1章読むごとにシールが貼られるシステムで読みました。しかし、ここに私の負けず嫌いが発動！誰よりも早く最後まで読むぞと意気込んで読み進めました。すると苦手だったジャンルの本に、私の方からはまって読んでいたのです。もともとカープにも野球にもそんなに興味がなかった私が、いつの間にか「鈴木！もっと打て～！」と読み終える頃には一緒に応援していました。本がきっかけで広島という故郷を見つめ、新たな世界に出会えた気がします。

❺重松作品と言えば『十字架』も

『赤ヘル1975』の作者である重松清さんの作品をもう1冊。この作品はいじめの傍観者が主人公の本で、当時中学生だった私には言葉も内容も重くて重くて、何度もやめようと思いました。しかし、私の心のどこかで「最後まで読まなければならない」って言われている気がして、1か月もかけてやっと読み切った作品です。簡単に人にオススメすることができないけれど、心から「読んでよかった」と思える作品です。小学6年生のときにドラマを見て、スクールカウンセラーになりたいと思っていた私ですが、対話を通して人が人を治療できる心理学に興味を持ち始めていた時期とも重なります。

❻考えるきっかけをくれた『何者』

中学2年生で読んだこの本は考えるきっかけをくれた本です。身近なSNSと就活がテーマの本なのですが、Twitterのツイートを軸に臨場感のある物語が展開され、人間関係の複雑な絡みのようなものが浮き彫りになってきます。この作品を読んで、いっそう家族や友人との直接的なつながりを大切にし、SNSとの付き合い方を考えるようにもなりました。

❼ときには息抜き 楽しみの本は七月隆文作品

中学3年生で『君にさよならを言わない』を手にとって以来、七月隆文さんという方の作品が大好きです。だって物語が「僕には、幽霊が視える」という衝撃的な書き出しからスタートするんですよ。ある時、幽霊が見えるようになった主人公が、消化しきれなかった魂の願いを叶えていく短編集で、あまりにも無常な死というものに対して、読んでいる私が悔しくなるほどどっぷり感情移入し、泣いてしまいました。本当に切ないんですが、温かいんです。毎回、七月先生の作品はタイトルに「？」を浮かべながら読むのですが、読み終わって本を閉じ、タイトルを見たとき「ああ、そういうことか」と納得する瞬間がとても好きでした。恋愛ものはあまり読まない私ですが、七月先生の本は、土曜日の昼下がりぐらいから一気に読み直して、涙を流すという日が1年に2・3回あります。

❽座右の書『生きがいについて』

高校1年生で私は、ついに自分にとってかけがえのない1冊と出合います。この本は岡山県にある国立ハンセン病療養所長島愛生園で精神科医をされていた神谷美恵子先生が書いた本です。中高6年間所属したクラブ活動での学びとも重なりますが、実際に神谷先生が読んだ本が置いてある「神谷書庫」を訪れて、彼女の人柄や生き方そのものに強く心を揺さぶられました。この本は社会的弱者である人物が描かれた精神医学書ですが、神谷先生らしい言葉の紡ぎ方や着眼点は、心理学の道に進むことを決めた私にとって今も心の拠り所となる本です。

❾心理学の名著『心の処方箋』

心理学の中でも臨床心理学を学びたいと考え始めた私は、その後この1冊を手にしました。スクールバスで通う道中に読んでいたのですが、1章ごとのテーマが簡潔で、現代人が悩みがちな問題に「そんなに難しく考えるな」と言われている気がして、バスの中で思わずクスッと笑ってしまうほどでした。読み終えると心がスッキリした感じがするので、受験勉強の合間に読んでリフレッシュしていました。

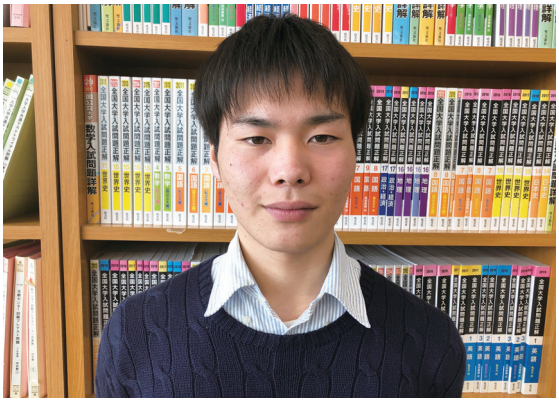
❿本格的な学びに触れた『児童虐待から考える』

高校3年生の時、教室の後ろにある学級文庫の中にあった本です。受験のために手を伸ばした本でしたが、「加害者」とされる人たちの状況や関係性に目を向けると、そうした人たちを救うことのできていない日本社会の問題点が見えてくるその理論に、衝撃を受けました。社会問題の根本的解決のためには多元的に物事を見つめなければならないということに気づかされ、私自身の視野がさらに広がったという実感があります。いじめや虐待、目に見えない貧困問題などの社会的問題に直面したとき、心理を学ぶことで誰かを救えるのではないかと、自分の学びへの思いを新たにした作品です。

●最後に酒見さんからのメッセージです。

私は高校生の後半で社会学系の本を手に取ったのですが、自分で本を探すことに楽しみを感じる一方で、誰かが推してくれる本を読んでみることも必要だと感じています。中学・高校時代はどうしても忙しい日常の中で本や図書館と疎遠になったりもするので、盈進の読書科の授業や、新しい図書館の存在は貴重なものであると改めて思います。実は、大学入学前に2冊の本を読んでそれぞれ2400字のレポートを提出するという課題が出たのですが、1冊は『夜と霧』という課題で、もう1冊は自分で選んでよいというものでした。そこで私はなんと『100万回生きたねこ』を選びました。幸せの定義についてもう一度考えてみたときに、中学1年生のときにこの本を読んだ私とはまた違う私がいたような気がします。明治大学の和泉キャンパスの図書館は非常に規模も大きく有名なので、そこで思いっきりいろんな本に手を伸ばしたいですね。そして自分が出合ったすてきな本は、一生のうちに何度も何度も読み返していきたいと思っています。後輩のみなさん、ジャンルを問わずいろんな本を読んでみてください。10冊の本との出合いが今の私をかたちづくっているように、どこに自分の世界を広げてくれる出合いが待っているか分かりませんから。1つ1つの出合いを大切に、学びも人間性も豊かにしてくれる本との出合いもその1つだと思います。

私の盈進読書科 ～卒業生の声②～



《2019年度高校3年生》

舩井 一真 （府中市立府中小学校出身）

慶應義塾大学 理工学部
学問D（機械・システム分野）へ進学
［中3時］英検2級　［高3時］英検準1級

読書の授業は中学1年生の時にはみんなで同じ本を読んで、自分の考えを表現したり話し合いをしたりしました。他の人の意見を聞くと自分1人では気付かなかった部分に気付かされ、そんな視点もあるのかという新しい発見があってとても新鮮でした。中学2年生になると、今度は自分たちの住む広島や学習旅行で訪れる沖縄についての本を読んで、世界がさらに広がりました。読書活動がいろんな科目の授業や学年の行事と繋がっていて、学びが深まりました。

中学3年生では自分自身でテーマを設定し、それについて調べたことをまとめる修了論文に取り組むのですが、小学校高学年から将来は航空関係の職業につきたいと考えていた私はすぐにテーマを「超音速旅客機」に決定。本やインターネットから自分にとって必要な情報を探し、集めた情報を選別してまとめるのは思った以上に大変でしたが、自分の好きなテーマということもあり一気に書き上げることができました。修了論文では情報を使い分ける力が身についたと思います。また、学年プレゼンテーション大会にも出場し、中学卒業時に優秀論文として表彰して頂いたときはとても嬉しかったです。

また、この修了論文を書いた後に、読書の授業で憧れの人に手紙を書くという取り組みがありました。その時、私は日本航空（JAL）の植木義晴社長（当時・現在は同社会長）に手紙を書き、なんとお返事を頂くことができました。実は植木さんは慶應義塾大学から航空大学校を経て日本航空にパイロット（副操縦士）として入社され、その後日本航空初の「機長出身の社長」となられたレジェンドです。手紙にはパイロットへの道筋と「夢を追いかけること、そして沢山勉強をしてバランスを持った人間になることを両立するように」というメッセージが。手紙は「頑張りなさい！！」という力強いことばで結ばれていましたが、これは盈進高校入学直前だった私の背中を強く押してくれるエールのようなものだったと思います。手紙は今でも大切に持っています。

私は高校1年生の頃からある程度行きたい大学を決めて勉強していました。それはパイロットになりたいという夢が変わらずあったからです。難関校の入試問題は典型題などはあまり出ず、多くの時間と思考力を必要とする問題がよく出ます。そんな応用問題を解くには基本がしっかりしていないと手掛かりもつかめません。だから高校3年生の夏までは基礎固めにこだわり、秋からはその基礎を問題で活用させて過去問などを解いていました。すると春には全く歯が立たなかった問題が冬ごろに解けるようになっていきました。やはり基礎の徹底は重要だと思います。また、勉強しながら感じたのは、読解力がないと、どんな教科も学力を伸ばすのは難しいということ。その点から言っても中学生の時期の読書の授業は非常に意味深いものでした。「読む」ことでインプットするだけでなく、論理的に「書く」ということ、そしてそれを発表の形で「伝え」、アウトプットすることで、「思考する」力がついたと思います。

後輩のみなさんに言えることは、できるだけ本を読んでほしいということ。本当に自分がなりたいものに近づくための勉強をするときに読解力は必ず必要になるからです。ぜひ読書の時間を活用して下さい。それから、盈進は様々な地域から集まった仲間とたくさん出会えます。自分とは違う考え方や価値観を持っている人とのつながりを大切にして、部活動に勉強に、充実した6年間を送ってください。私も受験直前には緊張で気が滅入ってしまうことがありましたが、最後まで一緒に勉強を続けた仲間がいてくれたからこそ乗り越えることができました。仲間の力は絶大です！

創作の授業で陶芸に挑戦（中学2年生）

JAPAN AIRLINES　JAPAN AIRLINES

日本航空　植木社長（当時）からのお手紙

《2018年度高校3年生》

後藤 泉稀（府中市立国府小学校出身）

早稲田大学社会科学部へ進学
2023年春より 新聞社勤務

私はもともと「書くこと」がとても好きでした。小学校で「ことばの教育」を受けていて、問答ゲームや詩の暗唱、視写なども徹底的に鍛えて頂いていたので、中学年までには基礎的な技術は身に付いていたように思います。高学年になるとさらに「考える」実践を重ね、スピーチなどにも取り組んでいました。

盈進中学校に入学した私は、その日の出来事を綴るEノートで担任の先生から頂けるコメントが嬉しくて3年間楽しんで書き続けることができました。反抗期の真っ只中にあった私ですが、「書くこと」で素直になれる自分がいました。3年間分のEノートは今読み返してみても成長の跡がきちんと残っています。

中学2年生になると、英語が好きになって「キャビンアテンダント」という夢を持つようになりました。それまでは母の影響もあり「看護師」を夢みていたのですが、学習旅行で沖縄を訪れた際に空港という「場」に大きな憧れを感じたのです。自分の夢を英語でスピーチする校内のコンテストにも出場するなど、思いを「書いて伝える」ことには常に積極的でした。

一方本を読むことは正直、得意ではありませんでした。でも、読書の授業で読んだ『一房の葡萄』や『十五少年漂流記』は心に残っています。『泣きみそ校長と弁当の日』を読んで、クラス全員が自分でお弁当を作ってくるという授業や『14歳からの仕事道』を読んで、自分の憧れの人に手紙を書くというものがありました。当時の私の夢は「キャビンアテンダント」から「医師」に変わっていて、沖縄の診療所の先生に手紙を書きました。母の知人の女医さんから『風に立つライオン』という本を頂いたことがきっかけでした。私の夢は、「本」との出会いによって少しずつ変化を遂げていったように思います。

中学3年生で取り組む修了論文のテーマは「ボランティア」。「医療」に興味があった背景には、気や災害など困難な状況に置かれた人を精神的・物質的そして技術的に支えるにはどうすればいいのか考えていた自分がいます。修了論文を書くことはもちろん自分の興味関心があるテーマを熟考する大切な機会だったのですが、それ以上に印象的だったのは、周りの仲間たちがそれぞれに興味があるテーマを見つけてそれをすごく楽しそうに調べている姿でした。クラスメイトが意外にも「火山」に強い興味を持っていたり、友達が「童謡」について熱心に調べている姿は今でもよく覚えています。

高校3年間はあっという間でした。否が応でも進学を意識しなければならなくなる中、クラブの先輩で新聞記者の先輩への憧れの気持ちが常にありました。その先輩が慶應大学出身ということもあり、早い段階から早慶を意識していましたが、高校1年生の時に初めて早慶のキャンパスを見て魅了されました。そして先輩の影響もあり、自分の夢も「ジャーナリズム」に固まってきました。

しかし高校3年生の9月から始めた小論文のスタートは「書けない・ネタない」壁への直面からスタート。今でもよく覚えているのは慶應の「来年1月1日から人類が鳥のように空を飛べるようになると仮定します。現在の法律および社会通念は人が空を自由に飛ぶことを前提としていないためさまざまな混乱が予想されます。解決策を述べなさい」という問題です。「書くこと」「考えること」に向き合う日々でした。地方に住みながら首都圏の私大を受験するのは大きなハンデがあります。入試問題が手に入らなくて東京にいるクラブの先輩に大学まで足を運んでもらい入試問題を書き写してもらったこともありました。何度も何度も考えて書いて、直してまた書いての繰り返しを続けて、3校目の受験で小論文を書いたときやっと初めて「書けた」という手ごたえの実感が生まれ、合格を頂くことができました。小論文や志望理由書を書いたり面接練習をしたりする中で、本当に自分のやりたいことがこの大学にあって、それが夢にもつながっているんだという実感が湧いてきたような気がします。やはり「書くこと」でだんだん自分が作られていくような感覚を覚えました。私の夢は小中高と変化を遂げていきながら、たくさんの出会いを通して今の「わたし」になっていく、そんな感覚です。

大学入学後も報道に携わりたいという夢は変わらず、この春から新聞記者になります。盈進で培った力は確かなものでした。「書くこと」は大学では学びの土台であり、さまざまな場面で情報を処理し、学びを自分の言葉にする力が求められるからです。また、グループワーク等を通して自分の考えを誰かと共有する際に「書く力」「考える力」を「話す力」に上手く転換できるかどうかも大事だと実感しています。

みなさんの中にも、将来どんな人になりたいかが決まっている人もそうでない人もいることでしょう。でもそれを発見するきっかけはきっと、みなさんの日常に溢れています。人や本、景色など様々な巡り逢いに気付けるようアンテナを張り、大切な「今」を過ごしてください。

中学2年次のドリームキャンバス

「あなたが あなたで あること」

The important thing about you is that you are you.
It is true that you were a baby, and you grew and now you are a child,
And you will grow, into a man, or into a woman.
But the important thing about you is that you are you.
(Margaret Wise Brown "The Important Book")

表紙絵：2023年度中学3年生／桒田和心
裏表紙：盈進中学校読書科／はじまりの1冊
マーガレット・W・ブラウン『たいせつなこと』